

第四話

大いなる何かが、自分を育てようとしている

「運命論」的な解釈の怖さ

では、「第四の覚悟」とは、何か。

大いなる何かが、自分を育てようとしている

そう心に思い定め、信じることです。

では、なぜ、この覚悟が大切か。

「究極の楽天性」が身につくからです。

そして、これが「究極の解釈力」と呼ぶべきものです。

そもそも、人生において、

なぜ、我々に「逆境」が与えられるのか。

苦労や困難、失敗や敗北、

挫折や喪失、病気や事故が与えられるのか。

その問いに対して、世の中には「四つの解釈」があります。

第一の解釈は、

「自分は、こうした不幸な星の下に生まれている……」

と考える解釈です。

しかし、そう解釈した瞬間に、我々は、抗いがたい「運命論」に巻き込まれてしまいます。そして、ひとたび「運命論」的な思いに巻き込まれると、その呪縛から脱することは容易ではありません。

なぜなら、こうした「運命論」的な解釈は、悲観的、否定的な想念を、我々の深層意識に浸透させてしまうからです。そして、深層意識の世界は、我々が意識できない世界であるため、こうした悲観的、否定的な想念が、ひとたび浸透してしまうと、それを、楽観的、肯定的な想念に変えることは、極めて難しいのです。

「運命論」的な解釈の限界

また、この問いに対する第二の解釈は、

「いまの自分は、運気が悪くなっている……」

と考える解釈です。

しかし、この「運命論」的な解釈をするならば、我々が為し得ることは、

その悪い運気を改善するために、占いをしたり、お祓いをしたりという「他力」的な方法に頼ることになります。

しかし、こうした「他力」的な方法は、いくらそれを行っても、実は、それによって、心の奥深くに

「これで、悪い運気が逃げていったらどうか……」

「まだ、悪い運気が残っているのではないか……」

「また、悪い運気に取り憑かれるのではないか……」

という不安と恐怖を抱き続けることになります。

すなわち、こうした「運氣論」的な解釈もまた、
我々の深層意識に、悲観的、否定的な想念を浸透させてしまい、
それを、楽観的、肯定的な想念に変えることは、極めて難しいのです。

ただ、この「運氣論」的な解釈には、

「自分の心の姿勢が、悪い運氣を引き寄せている」

「従って、自分の心の姿勢を変えれば、運氣も変わる」

という解釈もあり、これは「自力」的な方法にも結びついていきますが、
実は、これは、次に述べる「応報論」的解釈でもあります。

「応報論」的な解釈の深み

すなわち、この問いに対する第三の解釈は、

「自分の悪しき心の姿勢が、こうした出来事を招いているのだろう……」

と考える解釈です。

この「応報論」的な解釈は、

自分の心の姿勢を深く見つめ、それを改めることによつて、
人間として成長していくことができるという点で、優れた解釈であり、
その意味で、これは、一つの深みある解釈でもあります。

しかし、この「応報論」的な解釈は、ときに、自身の心の奥深くに、

「自分の心の姿勢は間違っている。だからこうした逆境が与えられるのだ」

という自己懲罰的な意識を生んでしまうことがあります。

それゆえ、この「応報論」的な解釈もまた、しばしば、

「自分の心の姿勢の間違いという『罪』の結果、こうした『罰』を受けるのだ」

という悲観的、否定的な想念を

深層意識に浸透させてしまうことがあるのです。

「負の想念」を生まない解釈

では、目の前に与えられた「逆境」に対して、
我々は、いかなる解釈をすれば良いのか。

深層意識に、悲観的な想念、否定的な想念を浸透させることなく、
人生において起こった不運や不幸に思える出来事を、
どう解釈すれば良いのか。

それが第四の解釈、

「大いなる何かが、自分を育てようとして、この逆境を与えた」

という解釈です。

この解釈こそが、深層意識に悲観的想念、否定的想念を浸透させず、

「だからこそ、この逆境は、必ず乗り越えられる」

「だからこそ、この逆境を糧として、必ず成長していける」

という楽観的想念、肯定的想念を育んでくれます。

昔から、この日本という国においては、

「かんなん艱難、汝を玉にす」という言葉が、多くの人々によつて語られ、

戦国武将の山中鹿之介が語ったとされる

「我に、七難八苦を与えたまえ」という言葉が伝えられました。

その背景には、人生における「逆境」というものを決して否定的に見ない我が国の深い精神性の文化がありますが、そのさらに奥には、逆境においてこそ、深層意識を楽観的、肯定的な想念で満たすことの大切さを知る人々の叡智があつたのでしよう。

「解釈」から「覚悟」へ

従つて、我々が「逆境」において抱くべき最も優れた解釈は、この第四の解釈ですが、もし我々が、

「大いなる何かが、自分を育てようとして、この逆境を与えた」

という思いを、「解釈」の次元から、

さらに「覚悟」の次元へと深めることができるならば、人生の風景が変わります。

いま、目の前にある「逆境」の意味が、全く違つて見えるようになります。

すなわち、その逆境を、

「ああ、この苦労は、自分に、このことを教えようとしているのだ」

「ああ、この失敗は、自分に、このことを学ばせようとしているのだ」

「ああ、この挫折は、自分に、このことを掴ませようとしているのだ」

「ああ、この病気は、自分に、このことを伝えようとしているのだ」

という肯定的な思いで見つめることができます。

それゆえ、

「ああ、大いなる何かが、また、自分を成長させようとしている」

そう心に思い定め、覚悟を定めるならば、

心の奥深くから、目の前にある「逆境」に正対していく力が湧いてきます。

実際、逆境とは、素晴らしい成長の機会なのです。

いま、あなたの人生を振り返ってみてください。

あなたは、いつ、成長されたでしょうか。

あの順風が続いたときだったのでしょうか。

あの幸運が続いたときだったのでしょうか。

あの成功が続いたときだったのでしょうか。

実は、そうではない。

あなたが成長されたのは、

逆境のときだったのではないのでしょうか。

あの夜も眠れぬ日々。

あの胃が痛むような時間。

あの天を仰いだ一瞬。

そうした日々を、時間を、一瞬を与えられながら、
それでも前に向かって歩み続け、懸命に歩み続け、
ふと振り返ると、我々は成長している。
一人の人間として、成長している。

それが、人生の真実ではないでしょうか。

だから、あなたには、その逆境において、
次の覚悟を定めて頂きたいのです。

大いなる何かが、

この逆境を通じて、
自分を育てようとしている。

いや、できることならば、

さらに一步踏み込み、

より深い、次の覚悟を定めて頂きたい。

大いなる何かが、

この逆境を通じて、

自分を育てようとしている。

そして、自分を育てることを通じて、

多くの人々の幸せのために、

素晴らしい何かを成し遂げようとしている。

では、なぜ、その覚悟を定めるのか。

それは、この覚悟を定めると、

心の奥深くから力と叡智が湧き上がってくるだけでなく、

人生において、想像を超えたことが起こるからです。

不思議と呼ぶべきことが起こるからです。

優れた先人たちが語る言葉

この日本という国においては、

逆境を越え、素晴らしい仕事を成し遂げてきた先人たちが、

その人生を振り返り、しばしば語る言葉があります。

「有り難いご縁に導かれ」

「不思議な出会いが与えられ」

「想像もしていなかったことが起こり」

そうした言葉です。

しかし、同時に、それらの先人たちが、
共通に心に抱いてきた思いがあります。

それは、

「多くの人々の幸せのために、素晴らしい何かを成し遂げよう」
との思いでした。

その思いが、先人たちの人生において、

「有り難いご縁」や「不思議な出会い」「想像もしていなかったこと」を
引き寄せたのでしょうか。

そして、その思いを、昔からこの国では、

「使命感」

と呼んできました。